

今日の箇所は、細かく見ると3つの話題が記されている。

1つは、12節から13節で、イエス様の昇天を見送った後、使徒たちが帰って来たこと。2つ目は、この使徒団に合流した他の人たちもいることが紹介されている(14節前半)。3つ目は、14節後半で、この人たち皆がしていたことが何であるか、ということ。

### 12節

「使徒たちは、『オリーブ畑』と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。この山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある。」

通常「オリーブ山」と呼ばれるこの山は主イエスがエルサレムに上る度に弟子たちと一緒に祈った山であり、最後は逮捕された場所でもある(マタイ23:3、26:30、マルコ13:3、ルカ22:39、ヨハネ8:1)。主イエスとの思い出が沢山残るこの山において主イエスは天に昇って行き、弟子たちはそこからエルサレムに戻って来た。このような「オリーブ山」は、しかし、これ以後は出て来ない。なお、終末の日に主が来られる場所でもある(ゼカリア書14章3、4節、ルカ19:29,37など)

『「オリーブ畑」と呼ばれる山』というのは、主イエスが子ろばに乗ってエルサレムに入城されたルカによる福音書19章29節のところ以降、数回出てきた名前である。ルカの19章29節によると、『「オリーブ畑」と呼ばれる山のふもとにあるベトファゲとベタニア』と書いてある。ルカによる福音書の最後に、主イエスが昇天の場所であるが、『「ベタニアの辺りまで」弟子たちを「連れて行って」昇天された』と書いてある。

「安息日にも歩くことが許される距離」というのは、律法の書に記録されているのではなく、律法学者たちが決めたものである。当時のユダヤ教の規則で言うと、2,000キュビト、すなわち1.12キロメートルという距離。エルサレムの市街の中心からオリーブ山の山頂までの直線距離が、正確にこの距離である。

わざわざ「安息日にも歩くことが許される距離」というのだから、この日は「安息日」だったのではないかと考える人もいる。勿論、復活してから「四十日にわたって彼らに現れた」(3節)という「四十」を正確に受け取ると、昇天日は安息日にならないけれども、そういう正確に「四十」と言わなければ、この日が丁度安息日だったから、こういう言い方をしているのではないかと思われる。

### 13 節

「彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。」

十字架上での主イエスの死後、使徒団が「泊まっていた」エルサレムの「家」と言えば、おそらく一番自然なのは、最後の晚餐を広間で開いたあの家であろう。14 節によると「婦人たち」や「イエスの兄弟たち」や家族たちがさらに加わって大勢になっているのでから、もっと大勢の人が入れるところではないかというので、使徒言行録 12 章 21 節、ペトロが牢獄から逃れて来て「マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った。そこには大勢の人が集まって祈っていた」という「大勢の人が集まって」祈れる家としての「ヨハネの母マリアの家」、ここかも知れない、とも考えられる。無論、最後の晚餐が開かれたのがそもそもこの「ヨハネの母マリアの家」であったのかも知れない。いずれにしても、今になっては特定することができない「家の上の部屋」である。

そこに集まったのは、「ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダ。」こう名前が挙がっている。

ここに挙げられた十一人の人物は、ルカによる福音書 6 章 14 節から 16 節に記された十二使徒の名簿の中から「イスカリオテのユダ」を除いた同じ十一人である。主イエスが定められた「十二人」という数は満たされなければならず、そのためペトロが提案し、他の人々もそれに全面的に賛成し、一人を補充する。次回の個所である。

「十二」という数字は象徴的な意味を持っている。十二はイスラエルの部族である。神はヤコブの子十二人をそれぞれの部族の長とする十二部族を立てて、これによって全世界の中に、御自分の民を用いて祝福をもたらそうとされたからである。民族としてのイスラエルはその使命を果たせなかったことを、主イエスは「十二」人を立て、これを新しい信仰の民イスラエルとし、全世界に神の祝福をもたらそうとされるのである。だから「十二」という数字は重要である。

「ペトロ」。筆頭弟子。使徒言行録におけるペトロはヤコブが殺された後、ヘロデに捕らえられ、続いて殺されることになっていたが、ある夜、御使いの導きによって奇跡的に脱獄し、兄弟たちに挨拶した後、姿を消す。後にローマにおいて殉教したと広く知られるが、使徒言行録の記録の中には記されていない。

「ヨハネ」。弟子の中で一番若く、最後に死んだ弟子であると言われる。初期の教会ではペトロと並んで重要人物で、二人は一緒に行動することが多かったが、ヨハネの名は 12 章以後には出て来ない。後に小アジアのエフェソを中心とする教団を組織して、パトモスで殉教。

「ヤコブ」。ヨハネの兄弟。主イエスから最初に召された者の一人。12 使徒の中で最

初の殉教者(12:2)

「**アンデレ**」。ペトロの兄弟。彼がペトロを主イエスのもとに導いたよう(ヨハネ 1:40. 41)。

「**フィリポ**」。ヨハネによる福音書によると、ペトロとアンデレの町ベトサイダの出身であり、カナの人ナタナエルを主イエスに連れて来た人。

「**トマス**」。ディディモ(双子という意)と呼ばれ、インド伝道に行ったという伝説。

「**バルトロマイ**」。トルマイの子という意。ナタナエルの別名ではないかという説がある。彼もインド伝道に行ったという言い伝えがある。

「**マタイ**」。徴税人であつたらしい。マタイによる福音書の著者とされている。

「**アルファイの子ヤコブ**」。「**ゼベダイの子ヤコブ**」と区別してこのように呼ばれ、「**小ヤコブ**」(マルコ 15:40)とも呼ばれる。名前しか知られていない。ナザレのイエスとは親戚関係のようである。

「**熱心党シモン**」。「**熱心党**」は当時のユダヤ人の国粋主義運動のセクトで、反乱を起こすこともあつたよう。彼は主イエスの弟子になる前はそのような運動に加わっていたのでこのように呼ばれていたよう。

「**ヤコブの子ユダ**」。「**イスカリオテのユダ**」と区別するためにこのように呼ばれたのである。マタイによる福音書(10:3)とマルコによる福音書(3:18)の弟子リストにある「**タダイ**」が同一人物ではないかと言われている。

#### 14 節前半

「**彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たち**」

ここは、使徒団に加わっていた人たちが紹介されている。

「**婦人たち**」とは、ルカによる福音書 23 章、24 章などにも出て来ているように、イエス様の死と復活の証人となる女性たち、と考えられる。

ここで注目すべきことは、「**イエスの母マリア、またイエスの兄弟たち**」という、いわゆる聖家族の人々が加わっているということである。

「**イエスの母マリア**」については、クリスマス物語以降、出ていない。ルカによる福音書 8 章 19 節にちらっと触れられているだけ。

「**イエスの兄弟たち**」。

これもルカによる福音書の「**母**」が出てきた 8 章 19 節に「**母**」と一緒に一度出てくるだけである。マルコによる福音書 6 章 3 節では、その「**兄弟たち**」の名前が分かる。「**ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン**」、こういう名前の兄弟たちであつたと伝えられている。そして、ヨハネによる福音書 7 章 3 節から 8 節までのところで、兄弟たちが主イエスを“**祭りに上って行って公に示すべきだ**”とそそのかすやり取りが出てくるが、そのところでヨハネによる福音書ははっきりと「**兄弟たち**」は「**イエスを信じていなかったのである**」と明言している。

だから、復活するまで主イエスを信じていなかった聖家族の人たちが、ここでは、一

転して十一弟子と一緒に祈っているということは、本当に驚くべき 180 度の転換である。どうしてこんなことが起こったのか。考えられることはただ一つ、主イエスが復活し、そして復活のキリストがこの兄弟たちの前に現れた、という出来事ではないかと思われる。

コリントの信徒への手紙一の 15 章に、イエス・キリストが顕現したリストが挙げられているが、その 5 節に「次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ」とパウロは伝えている。ここで名前が挙げられている「ヤコブ」は、「主の兄弟ヤコブ」である。彼はこの後、初代エルサレム教会の重鎮として、ペトロと共にこの使徒言行録にも出てくるし、パウロのガリラヤの信徒への手紙にも出てくる (1:19、2:9、12)。

やがて、復活のキリストはダマスコ途上のサウロにも現れて、迫害者サウロをキリスト教の伝道者に 180 度回心させる。それと同じように、信じていなかった兄弟にも現れて、そして信者に変える。そういう力をもって復活のキリストが顕現されたのだと思われる。

#### 14 節後半

「心を合わせて熱心に祈っていた」

「心を合わせて」と訳されている言葉はギリシア語で、ὁμοθυμαδόν (ホモスマドン) である。「ホモ」というのは、「一つのこと、同じ」。「スマドン」というのは、「情熱を込めて、愛情をもって」。そういう意味の言葉で「ホモスマドン」と一口でいうと「同じ感情で、同じ気持ちで」という言い回しである。新約聖書の全部で 11 回出る中で 10 回が使徒言行録に出てくる。それほどルカ好みの表現と言える。

「熱心に」と訳されていることば (προσκαρτερέω、プロスカルテレオー) は、「ゆるがないで忍耐強く続ける、専念する、ねんごろにする、愛着する」という意味。この言葉は、新約聖書全体で 10 回ほど出てくるうちの 6 回が使徒言行録に出てくる。また、その 10 回のうちの半分くらいが、「祈り」と組み合わせて出てくる。「わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします」とペトロが後ほど言う場面 (6:4) があるが、「専念する」と訳されているのが同じ言葉。あるいは、ペンテコステの日に洗礼を受けた何千人の人々が「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」という「熱心であった」というのも同じ言葉である (2:42)。ローマの信徒への手紙では、「たゆまず祈りなさい」という「たゆまず」(12:12)。コロサイの信徒への手紙では、「ひたすら祈りなさい」という「ひたすら」(4:2) と訳されている。とにかく、「もっぱら、たゆまず、ひたすら」に祈っているという姿を表したいのであろう。